

第14号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十四年五月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによって、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

おかいもの	大西亥一郎	1
塔	柴小路秀磨	23
窓辺	高阪博一	29
一陣の風	大西隆史	34
生きる	大西隆史	36
春愁	夏子	39
前田純孝賞	学生短歌コンクール	41
儂い花に理想を乗せて	大西裕子	42
アクトス写真館		46
孫という名の宝物	小川悦子	47
賞味期限	高阪博一	49
あなたへ	小川悦子	51
会員名簿		53
編集室から		55

おかいもの

大西亥一郎

伊藤真一は退職して、完全にリタイアすると、『ワシも族』になった。

朝は早く目覚め、一日のたりのたりと過ごす。妻の令子に『粗大ゴミ』扱ひされ、またはべつたりと張り付いてとれない『濡れ落ち葉』とも揶揄される。

退職後の二年間は、再雇用に応じて、王子建設の研究室にいた。だが給料は三分の一の二十万ほどになる。部長職から一般研究員になり、責任がなくなると意欲も削が

れる。室長をはじめ後輩は大切にしてくれる。だが、しらりとした風が吹いているのは判っている。

「部長」の呼び名が「伊藤さん」になり、彼に向かう若い者の表情に次第に締まりがなくなつた。同じことを言つても「そうですね」と軽く受け流されることが多くなつた。アラサー臨職の淹れてくれるお茶が薄くなるなり、やがて一番最後になつた。

「辞めるぞ」

妻の令子に言うと、リビングの空気がビシリと鳴つた。

令子の細長い顔の筋肉が引き締まり、に

こりとしながら額にしわが寄った。

五十八歳という歳のせいもあるが、このところ化粧が厚い。真一は目の端で時折、『塗り壁』を垣間見ながら言葉が続けた。

「計算したが、年金の前倒しで食べられるな」

令子のしわがますます深くなり、ほほがぴくりとして、ゆつくりと太い声をした。

「何をするの」

専業主婦で錆び付いてきたが、お水茶女子大学文学部卒の脳みそが全力で回転しているのがわかる。真一は旧帝大理工学部の首席卒業である。

「ゴルフ、陶芸」即座に二つ出て、一呼吸置

いて続けた。「海外旅行」

「いいわねえ」

令子の声の調子がモノトーンになった。感情の起伏が一度でなくなり、顔面筋が緩み、意地悪さの中に落ち着きのある老婆の眼になった。

アメリカのニューヨーク、ナイアガラ瀑布、ラスベガス、ロス、ハワイ。北京と香港、台湾。イギリス、フランス、イタリア、スイス、ベネルクス三国。オーストラリアと回って令子の憑き物が落ちた。

友達同士の『女子会』に所属して、国内

から近隣諸国まで、ランチと買い物に出かけるようになった。

それ以外にも、短歌の会とかで月に一度はいそいそと出て行く。吟行というのもあつて、泊まりがけの場合もある。こちらは少数の高齢の男性もいるようだが、『ジバサン会』である。

『ジバサン会』は真一の命名である。「ジジ」と「ババ」の会、『ジバサン会』である。

『女子会』を『老婆怪』というのも真一がつけた名称である。令子には「女子会にでかけるのか」と言うことにしている。たまに冗談で「老婆怪にでかけるのか」ということもあるが、令子は「老婆」という響きに反応

し、顔を歪める。まさか真一が「会」を「怪」の意味で使っているとは知るよしもない。

真一は『男子会』に出かける。ゴルフは週に一度だが、汗を流して風呂につかり、友人達と飲み歩く。陶芸教室は『拡大男子会』である。毎週火曜日だが、焼き物以外に楽しみもある。若い女性も結構多いのだ。いつでも三、四十代くらいだが、真一の目にはぴちぴちギヤルに見える。これは本当にそう見える。二十代の女性、とくに二十歳前後などはガキにしか見えない。

「ガキだから、ビチビチギヤルだ」と内心思っている。「ぴちぴち」と跳ねる感じでは無

く「ビチビチ」とお漏らしする感じなのだ。

これは自分だけの感覚か、同年代の高齢者もそうなのか、一度訊いてみたいと思っっている。もつとも『男子会』の仲間には、若ければ若いほどいいという手合いもいる。実際で言えば、その未熟さ低能さに辟易するだろうが、相手にされないから、性的願望だけで若さを求めるのかも知れない。

『男子会』は、仲間内で他愛のない会話をしたり、集団で居酒屋へ雪崩れ込むくらいの楽しみである。

「あら、男子会。いいわねえ若い女の子も来るんでしょう」と令子は言うが、それは罪の

ない楽しみだと判っているからだ。真一の性欲そのものの減少も知っているし、セックスへの興味も消えかかっているのも承知している。男性機能そのものも疲労し劣化している。

性欲に伴う人間関係の鬱陶しさは、若さの暴発でしか乗り越えられない。だから令子の『男子会』というのは「男子かい」と疑問符がついている。身体づくりは大きいのが、老朽化しているし、性的にはもう男ではない『男子会』なのだ。女子会も同じようなものだと思いつつ、令子の言葉を聞き流している。

だが、女子会は延々と続くのに、男子会は一年ほどで下火になった。

政治、経済、ゴルフの話題は、一通りのことを喋り終えると、新しい出来事でもない限り、誰も口にしなくなつた。学歴や社会的地位が近いものが集まつて話題に違和感はない。だがそれぞれの考えは次第に鮮明になり、話が進み、時間が積み重なるほどの差が互いの精神にこたえる。肉体だけではなく心も老朽化してボロボロになり、弾力が失われ、縮んで小さくなり出している。

健康の話も相互に聞き終えると退屈になる。なにより同じように見えながら体力

の差が歴然と現れるのが還暦後である。マラソンランナー然としている仲間を見ていると、自分の垂れて膨らんだ下腹が気になる。

真一の心が離れるのと同時に他の全員の足も遠のいた。

お互いの自慢話は辟易した。それでも、少なくとも学歴や職歴を何度も確認しあい、その場の雰囲気に入るだけで過去の歩みを肯定することが出来た。人生の栄光が無視され、消えていく傷が生暖かい『男子会温泉』に浸ることで癒やされてきた。それがなくなつた。しばらくは酷い湯あたりのような気分がした。時には懐かしくもあつた

が、積極的に集まろうという気はおきなかった。

陶芸教室では、経験の差が焼き物にはつきり現れた。若い頃ならば、負けん気ではなればれたものだが、その根気もない。芸能やタレントの話にはついて行けない。

年齢、性別も学歴も職歴も「陶芸」という一点で集まると、笑顔と人をそらせない会話、無頓着で開けつびろげな行動が好ましさになる。

高い知識も豊かな教養も必要ない。部長として真一が人生で培ってきたビジョンを示す能力もリーダーシップも戦略的思考

も求められない。女の子を引きつける素朴な戦術的テクニックと、妻と子どもへの愚痴、天気と相撲と野球にサッカーの話題、芸能ゴシップに韓流ブームについて知っていればよかった。

真一はそうしなければいけないことを頭では十二分に理解しているつもりで知識や態度に、心も体もついて行けなかった。最も拙いのは、頭の中の理屈が先行して、まずは単純に土塊をこね回し焼いたただけの物が、上手く出来ないことである。

同年代の林や小鍋、土井、高田といった男性連中が、雑談を楽しみつつ、いい物を作り上げるのが妬ましく羨ましかった。女の

子と楽しげにふざけ合う高田達に飛び込めない自分が情けなかった。

彼らは、再雇用とかで鉄工所で未だにねじ切りをしていたり、週に三日は道路工事の警備員に出かけたりしている。その仕事をしながら、陶芸や、囲碁将棋、俳句や短歌、カラオケと言った金のかからぬ遊びを堪能しているらしい。ゴルフや絵画や音楽、劇団四季も歌舞伎にも、レクサスやロレックスにも縁のない連中である。

センスの良い服装や持ち物、知的な会話、オーデパルフラムが微かに薫る清潔なオーダーメイドのシャツ。そういった真一の生きた世界とは全く接点がなかった。

陶芸教室の忘年会で、前に座った高田洋三が同じ市内の生まれと知って身を乗り出した。住所も数キロほどしか離れていない。カラオケや短歌などもしている多彩な男である。確か少ない年金の足しに清掃員に出ている男であった。

「どちらで？」ひとしきり出身地の話をすると訊ねた。「小学校は何処で？」

田舎ならば、郷土の懐かしい話題に花が咲くかも知れない。小中高は、大同小異である。「小学校は」と訊かれても、数も少なく、程度の差もない。先輩後輩と言うこともあるが、若い時代はともかく、還暦過ぎの

身には親子ほど離れていない限り大きな意味はない。

だが、真一の出身市のような百数十万人の政令指定都市だと、小学校は二百校近いし、中学も八十校ほどある。殆ど話題のあいようがない。

「あ、美田小です」

洋三は笑みを浮かべつつ言う。真一は「私は尾木部小」と言いつつ、話を進める。接点を探ろうと言うより、別の気持ちがあるのが誰にも判る。それは日頃の言動で感じている。

「中学校はどちらで」

「塩田中ですが…」

洋三の言葉に途惑いの響きが混じり出す。

学歴調査はされたくない。

「ああ、私の進んだ高津中から北西の学校ですな」真一は目玉をぎよろりと見開く。

「塩田中は野球が強くて有名だった」

「そうでした」

洋三は当たり障りのない返事をする。

そこで話題を打ち切りたい気持ち尻下がりの声色にでていた。中学までは、一部の進学校を除いて田舎も都市も学校差はない。多少見られたとしても、山手と下町で公立高校への進学率が十パーセントほど異なるという程度である。だが、高校と大学は

明確な格差がある。大都市ほど著しい。中学の成績がオール5でなければ入れない高等学校と、オール2や1のものが進む高校。その間は無数にランク付けされ、さらにそれに連なる大学へと結びつけられていく。

いかなる場であれ、自ら話し出さない限り、中学時代に中位以下の生徒にとつては触れられたくない『傷』である。

「そこからどちらへ」

真一は心持ちあごをあげて、全員に聞こえるように声をやや大きくした。

空気がビツと微かに引き締まる。

二人の出身市の高校は市立と県立だけで三十近い。これ以外に私立があり、序列

は歴然としている。

洋三の六十三歳の白髪頭が揺れる。平然と相手の目を見て答える場合は、成績が上位三分の一くらいの者が進む高等学校である場合が多い。

部屋にいる八名ほどの男女の耳が、シンと音をたてる。

「西城です」

洋三が目をそらし吐き出すように言う。

西城高校は、二つある。一つは県立で一つは私立である。県立ならば、高校のランクは上から十位以内だが、私立ならば下から数えた方が早い。

「あ、どちらの？」

真一は追い打ちを掛ける。

洋三のこめかみが細かく動いたのを見逃さなかった。

誰かがつばを飲む音が聞こえた気がした。

ぎこちなく固まった言葉が洋三の口から吐き出された。

「東区の」

居酒屋の一室が怒気を含んだ暗緑色に染まった。

洋三が答えたのは私立の西城高校である。「私立の」とは言わない。「東区の」という言い回しに、瞋恚の炎を含みながら、反面、洋三の気の弱さと出身校を卑下する気持

ち、屈辱感が滲み出ている。

「あ、そうですか」

真一は、引きつった笑顔を浮かべて話題を閉じた。

自分の高校は言わない。言わなくとも、彼が旧帝大理工学部出身で大手企業、王子建設の管理職だったことは知れ渡っている。

高田洋三の顔は色がなかった。能面のようである。目玉だけが所在を求めて落ち着きなく動き回っていた。

気まずい空気が流れる。全員、私立西城高校が陰では「あほ西」と呼ばれて県立と差別されていることを知っている。自分も訊

ねられるのではないかと、内心穏やかでない者もいる。

「あ、あの粘土、良かったねえ」

その場を救うように別の男性が話し出した。

真一は陶芸教室でも、退職した仕事の話を持ち出していた。自分が有名超巨大企業に勤め、管理職であり、技術家として優れていたことを話したくて仕方がない。

知らない者が「お仕事は何をされていますか」とでも訊ねようものなら、「旧帝大の理工学部を出て、王子建設の研究室で橋梁設計の部長をしていた」と答える。

「橋の設計」とでも言えばすむ。「王子建設」を付け加えれば、それだけで全ては伝わる。現役時代は実際そう答えていた。しかし、退職後はそれしか自慢するものがなくなつた。

『男子会』のゴルフでは互いが互いを認め合い、エリートの一員として歩んできた人生の残り火の中で満足していた。

真一が「旧帝大の理工学部です」と言えば、相手は「いやあ素晴らしい、私は私立の早稲田ですよ」と謙遜しつつ鷹揚に構えていた。たまに高校卒がいても、彼は有名IT企業の取締役であつた。

陶芸教室では、そんな者は余りいなかった。

た。叩き上げ、身体で技能を習得し、子育てをして晩年を迎えたものが多かった。

自慢は懸命に生きたこと、退職後も働き続けていること、カラオケやスポーツをするのが好きなこと、陶芸、短歌や俳句に思わぬ文才を見つけて無邪気に喜んでいることなどであった。

真一にはそれがなかった。何をしても下手な気がした。学生時代は学業と同じく、どれもこれも人並み以上に出来たと思っていたが、長い時間がすべてを蝕み尽くしていた。

息子夫婦と孫自慢は、自分がしても他人のものを聞いても虚しかった。自分自身の

ことを話すのではない、子や孫の自慢である。嬉しくないことはないが、自分が時代から去り、時間の流れの中に溶け込んでいく寂しさが纏わり付いていた。

真一はさらに、年齢にこだわるが多くなつた。最初は、歳上から若造扱いされることが癪だった。「歳なんぞ、誰でもとるのだ」と内心思つて腹が立つた。「俺は歳のことなんぞ、九十歳になつても持ち出すものか」と考えた。だがそれは最近怪しい。相手の陶芸の技量が遙かに上でも、歳下と聞くと、自分の言葉遣いが微妙に傲慢になるのが判つた。そしてそれと気づいていても直すことが難しかった。

學歷と経歴自慢が通じなくなると、残るものは年齢しかなくなる。それは「長老」「老中」「若年寄」「家老」「老練」といった語句に籠められた意味を失った残骸である。消え残った土まみれの雪の様な刻の堆積。ただ、生き続ける限り、決して減ることもなければ追い越されることもない代物であつた。

居酒屋の件があつてから、真一は陶芸教室に行かなくなつた。聞くところでは高田洋三も姿を見せなくなつたらしい。

真一は自宅に籠こもることが多くなつた。庭先に囲いを作り轆轤ろくろと電気窯を買つ

て、小さな皿やコップを焼いた。「あら素敵」と褒めていくれた令子も、数が増えるの見向きもしなくなつた。親戚や友人、近所周りに配つたが、貰つた方はお返しを考えねばならない。いくら「気になさらないで下さい」と言つても、無理な話である。

貰つた方は捨てることもしにくい。欲しくもない素人然とした使いにくいデザインのものやコップが食器棚で威張つている。これならまだ畑でとれたナスやキュウリをくれた方がましである。消費できるし、好きでなければ他家に回してもよい。

轆轤と電気窯は埃を被るようになった。

真一は、たまにパチンコに出かける。時間つぶしである。本も読もうと山ほど買ったが、若い頃、心躍った推理小説も時代小説も楽しくない。「哲学ノオト」も「物理学のスズメ」にも知的好奇心が湧かない。ノーベル文学賞作家の本も、芥川賞の受賞作も、どうかするとただ嫌悪感だけの性描写が気になる。

令子がない時は掃除機も掛けるし、布団干しもする。洗剤と柔軟剤を投げ込むだけだが洗濯機も回す。洗い終わったら、とりだして物干しに掛ける。改めて令子の下着を見て「なんでこんなに小さいのだ」と思う。六十前だが、小柄で若々しいでたち

で、五十歳前後に見えぬこともないが、いつも目の前にある令子の出てきた腹回りから考えると、どう考えても入りそうもない。「世の女どもは、みんなこういうもので体型まで化けているのか」と六十四歳になって、はつきりと気がついた。

真一は、勤め口を探すことにした。

仕事をしていない男は男でない気がした。なるほど「男」という漢字は「田の力」と書く。よくできている。戦前までは、少なくとも、動けなくなるまで、田や畑で男は男でいることが出来た。だが今は違う、技術や経験はすぐに陳腐化し、役立たなくなる。身

体と頭が健全でも、六十を過ぎると、ただ空間と時間を消費するだけの重い存在になる。

元の職場は最早居場所がなかった。再雇用のままであれば六十四歳までいることが出来た。それを過ぎればお払い箱だった。頑強で単純技能職であれば、七十歳くらいまでは、守衛や営繕という仕事はあったが、元管理職の研究員など、迷惑なだけの存在である。子会社や系列企業に出すにしても、肩書きの重いお荷物など、国際化の競争の波に飲み込まれた企業には抱える余裕は無かった。

ハローワークに登録した。研究実績はあ

る。橋梁工学に関する知識も技術もある。外国文献さえ読むことが出来る。また管理職としてビジョンを示し部下の能力を引き出しまとめ上げてきた自負もある。

だが仕事はなかった。

どうしても言うことであれば、陶芸教室で自分が馬鹿にしていた警備員や掃除夫の仕事はあった。フルタイムの単純作業で、月収は十二、三万になる。だがプライドがあった。フルタイムの単純業務で僅かな収入というのは、技術も経験も、長老、年配者として貴重な集団調整統率力も何もかも認められていないということだ。それが悔しかった。喰うための金が欲しいわけではない。

働いて、「金を稼ぐ」ことが「田の力」の男  
だとしたら、それが出来ないのは「男」では  
ない。

反面、割り切つて時間つぶしと小遣い稼  
ぎに徹するとしても、長い拘束時間と単純  
業務は苦痛である。といつて男を捨てて時  
間の海に沈み行く「老いた人」になる覚悟  
はまだなかつた。

真一は、テレビの前でゴロゴロするようになつた。

朝起きて布団を上げて顔を洗い、ろくに  
着替えもせずに食事を義務的に済ませる。  
新聞を読みトイレに入り、モーニングショー

を見るでもなく眺めていると昼になる。昼は  
食べたくもない。コーヒーを一杯飲み、お昼  
のワイドショーを眺める。令子がいけない時は  
洗濯や干し物、掃除をする。天気が良くて  
気が向けば布団も干す。通信販売でとつて  
いる総合雑誌を眺める。掃除機を掛けて布  
団を敷く。夕刊をとりに行き、風呂に入り  
夕方のニュース番組を見る。プレミアムモル  
ツを開けて新聞を見ながらレトルトの夕食  
をとる。そのままテレビを見たり、朝、撮り  
ためておいた録画番組を見る。冷やした神  
鷹大吟醸を飲みつつ9時になるとNHKのニ  
ュースを見て、眠くなれば寝る。そうでなけ  
ればニュースステーションにチャンネルを合

わせる。いずれにしても十時か十一時前後には寢床に潜り込む。

ふわふわと、漂うように、何の刺激も受けてに時が流れていく。時折、時事ニュースに反応して令子相手に持論を展開する。

「そうねえ」

令子はその通りという風に、同じ意見を何度も言う真一に相づちを打つ。どうでもいいような「そうねえ」は下手な芝居だと真一は思いながらも、形だけでも受け入れられたことに満足して眠りにつく。

横になってテレビ番組に溶け込んでいる真一が、突然起き上がることがある。

令子が「買い物に出かけてきます」と言う。その声を聞くと、突然ガバリと起き上がり「わしも」と言う。「ワシも族」の誕生である。

買ひ物の手伝いではない。そう見せかけつつ、何のことはない、運動不足の解消を兼ねた気分転換である。

令子はうんざりとする。じろりと見て「いくの……」とため息とともに言葉を吐き出す。

真一は次第に『主婦』に目覚めてくる。こうなると厄介だ。

店の棚の奥をひっくり返して、消費期限を確かめる。リンゴを手に載せて重さを量

りだし、一番上のものを総てを量って結局元のリンゴに戻る。牛乳を前に順にずらせて、一番奥のものをとる。ヨーグルトも値段と日付を睨んでかごに入れる。

買い物の方が慣れてくるだけならいい。次に、新聞に挟み込まれた広告を、隅から隅まで眺め出す。

何せ暇である。

「ほらみてみ、この店の方、そばひと玉17円やで、そつちは19円や……。まあ品質もあるやろけど」

「これ売り出しや、コーヒーよう飲むから買いだめしとこ」

「あそこはアイスクリーム土日半額やで、午

前中にいかんと、ええもん売り切れてまう」  
と、広告に丸印をつけ出す。そして買いだめをはじめから、69円のポテトチップスが10袋も狭い納戸にたまることになる。冷凍庫にそばとうどんの玉がぎつしりと詰まる。納戸にラーメンが山積みになる。

「どうだ、安いものを買っただろう」と鼻腔を膨らませる。しばしの自己有用感、自尊心に浸れる事も可能であるわけだ。もと『ワシも族』である。体を動かさせて、気晴らしをして、安いものが買えるとなると寒風も気にならない。

だが、真一は初心者である。いくら頑張っ

ても日常の買い物を二十年、三十年と続けてきた主婦にかなうわけではない。

メーカー品なら兎も角、うどんやそば玉、豆腐となると、小さな商店の製造したものが多いから、品質が判らない。

真一がある店で一個70円というおにぎりに飛びついたら、のりの品質も悪いし、具も酷い、米もよくない。

「しまった！ これならコンビニでおむすび買った方が良かった」

それみたことかという令子の視線と冷笑に凍りつきながら、不味いおにぎりを口に含み、見えぬように涙をにじませ、飲み込んだ記憶がトラウマとして残っている。

やがて真一の「おかいもの」回数が少なくなつた。

真一は、「自分史」を書き始めた。

後は朽ちるだけであるとしても自分の生きた証を残したいと思つた。それは如何に努力し苦勞して一流の大学から一流の企業に進み、出世したか。息子達を大学まで行かせて、孫も優秀であるかと言うことを残すことであつた。

生い立ちや環境の描写がなく、細かな出来事の説明が続き、説教が延々と述べられる。失敗や恥辱、貪りや怒り、愚かさや嗜虐性といった人生の重要な側面が抜け落ちた

記録集であった。

少し書いては打ち出す。理系の真一にとつてパソコンは友達のようなものだ。しかし今までは、メールや業務書類、エクセルでの計算業務、CADによる設計などにしか使つてこなかった。

情緒や感情が交じるキーボードの使い方は殆どしなかったといつていい。だが、現在は違う。感情を文字として打ち出す。言葉はキーボードに移し替えるのだ。真一はそう思っていた。

が、実際は理系の短く結論を急ぐ文章が、急ごしらえの形容を纏っているに過ぎなかった。文を書くポイントはたちまちに掴ん

だが、心はどこかに置き忘れていた。あたかも他人の立場で客観視しているように偽装して自慢話を延々と書き連ねていることに、真一自身もうすうすと気づいていた。

遠くにいる息子夫婦も、小学生になる孫も、そしてもちろん妻の令子も真一の自身史を読み終えるところんざりという顔をおし隠して続けた。

「へえー、土木工学科の主席だったの」

「あの架け橋のメインの設計者とは知らなかったな」

「ドンドン書いて、いずれ小説も書いてみたら」

「芥川賞を狙えるかもねえ」

令子がしわを深くして、ほほをびくりとさせ、ゆつくりと太い声で言った。

真一は、その明快な理性で全てを理解した。

赤裸々に自分の弱さや醜さを表明する勇氣も、感情の糸を解きほぐし、或いは紡ぎ込み込んで行く豊かな情動も、長い人生の中で枯れ果てていることを知っていた。

一冊の本を自費出版して配った。立派な装丁の五百部の本は二百万ほどもかかった。親戚知人に配り歩いたが、書齋にはタンヌほどもある本の山が残っていた。出版元の芸文新舎は書店流通もするという話であつ

たが、売れたのは真一自身が注文して買った数冊に過ぎなかった。

「ちよつと、買い物に」

小雨が霧のように降り注いでいた。それでも、リュックを背負い、片道歩いて一時間以上はかかる店にでかける。折りたたみ傘は入っていたが差さなかつた。心の動揺と火照りを、時間と冷たい霧が癒やしてくれるはずである。

（俺の人生……）

誇らしい日々は、リタイアした時点で断ちきられていた。限度まで使い古された身体も心も、歪みきり汚れきって復元力はな

かった。金属疲労は極限になり、後は壊れていくだけであった。誰でもこんなものだと、自分に言い聞かせて地面を見ながら歩いた。

雨粒が大きくなり始めたマーケットの広い駐車場に入った時、真一は目の前に男の靴を見た。薄汚れ、くたびれて艶の消えた革靴であった。

横に長いこうもり傘の錆びた金属の先が見え、静かに持ち上げられていった。

真一はゆつくりと顔を上げた。

「高田さん」

眼前に歪んだ高田洋三の顔がクローズアップした。

ドンとバットで殴られたような衝撃が左

脇腹にあった。

「なにを……」

と言いかけて自分の腹を見た。金属の長い石突きが、上ろくろの部分までめり込んでいた。

真一は再び顔を上げようとした。しかし身体がくの字になり、視界がストーンと闇に消えた。

了



flickr from Yahoo

「塔」

柴小路 秀磨

ていると思えばさして苦にならぬ。

今朝も逆光の中、五重塔は黒々と鎧をまとった古武士の如く、背筋を伸ばし、悠然と私の前に立ちほだかる。

この冬、私は観光協会が企画する「京の冬の旅」で、「東寺」の五重塔の案内役を引き

き受けた。期間中冷たい雨や、雪の舞う五重塔と対峙せねばならぬこともしばしばあるが、好きな寺で愛する五重塔とデートし

ていると思えばさして苦にならぬ。凍てつくような寒さにもかかわらず、東寺には毎日観光客の絶えることがない。土日ともなれば狭い塔の中は人であふれる。ことに二十一日の「弘法さん」の人混みは大へんなもので、正に日本の観光客の全てが今ここに集結したと言わんばかりの賑わいである。

縁日の賑わいはともかく、年間を通じて何故かくも多くの人が京都を訪れ、そして寺に足を運ぶのであろうか、恐らくその多

くは、信仰心とは関係なく、「寺」という非日常の空間に心惹かれるのではあるまいか。

かく言うこの私も、寺好きが高じて京都に移り住んだわけだが、そもそも私の場合は寺という「建築物」そのものに惹かれるのだ。深い軒を支える組物の美しさは実用品であると同時に芸術品である。建物自体が大いなる美術工芸品であり、それは私にとつては所有することの許されぬ美術コレクションである。ならば、できるだけその近くに自分の身を置きたいという思いが募った結果である。

小学校の低学年の頃から何故か私は「お

寺」に惹かれた。京都や奈良に近いという神戸の地の利も関係しているのだろうが、とにかく暇さえあれば寺の写真や絵葉書を飽きずに眺めていた。市電に乗っていても車窓に広がる街の中にお寺の大きな屋根を見つけると、ワクワクして思わず途中下車し、その存在を確かめに行くということもよくあった。母に連れられて行った京都、遠足で訪れた奈良、そこで見た寺の景観は幼い私の心をとらえて離さなかった。クラスで自己紹介では、「僕の趣味はお寺を見ることです。」と言つては、仲間や先生を不思議がらせたものである。

何故私がそんなにお寺の建物に惹かれたのであろうか？。幼少より際立つて瘦身に虚弱な体軀の私が、伽藍がらんの軒を支える太くたくましい円柱や、壮大ないらか蕨あざみに心惹かれるようになったのも、その反動からだろうか……。今もつてわからない。ちなみに色彩的に言えば私は日本人好みの書院や茶室におけるモノクロ世界は好まない。あくまで大陸的な臭いを残す、朱に塗られた円柱と、緑の連子れんじに惹かれる。「青丹よし」の世界である。

ともあれ、幼い私は自分の足で近隣の寺々を彷徨し続けた。そんな中で私の心を揺

り動かし、今日まで幾度となく通い続けている三つの寺がある。奈良西の京にある薬師寺と、兵庫県にも奈良や京都に劣らぬすばらしい寺があるのだということを初めて私に知らしめた神戸の「太山寺」と、加古川の「鶴林寺」である。これらの寺に共通していることは、国宝建造物を有していることに加え、「塔」が現存していることである。

多くの人が寺院建築の中でも一番惹かれるのはやはり高くそびえる「塔」ではなからうか。日本建築の諸分野においても、最もすばらしいものと言え、城郭建築にお

ける天守閣と、寺院における仏塔建築を挙げること異論はあるまい。日本の多くの建築が単層で平面的な構成を持っているのに対し、これらの建築は立体的な構成を持ち、天に向かって高くそびえる形をとっている。

高きが故に、古来より焼失という悲運を抱えながらも、今も寺院の象徴として立ち続ける塔。塔は釈迦の遺骨、すなわち舍利を祀る施設として紀元前三世紀のインドに発生し、中国、朝鮮半島を経て日本に伝来する。それは楼閣の形態をとるにもかかわらず、人間が上がることのない、外から見上

げられるためだけの構造物である。釈迦の遺骨を象徴する舍利、その舍利を安置するために、幾重にも屋根を重ねた美しい姿で塔は屹立する。

田園風景の中に昂然とそびえ立つ備中国分寺の塔、東山の高台に京の町家に囲まれて立つ法観寺の塔（八坂の塔）、斑鳩の里の民家を背景に立つ法起寺の塔、そのいずれもが日本の伝統的な宗教空間の存在と存続を示す象徴的な風景である。

風景の中の塔。なかでもとりわけ私の愛するのは、この「塔」の遠望である。バスなどで寺を訪れる時、私はよく最寄りのバス停

を避けて、少し手前の停留所で降りることがある。遠くの家並みや、森の梢に見え隠れする塔を望見することがこの上もなく楽しいからだ。松林の緑の間にそそり立つその端麗な姿が、次第に近づいてくる有様は実にすばらしく、寺へ来た悦びと期待が深まるのである。「あつ、塔が見えた!」、そう思ったらバスを降りて塔を目ざしてまっすぐに歩いて行く。これが私の古寺探訪の極意である。

恐らく古人も遙かに塔を望みながら、誘われる如く引き寄せられて行つたに違いない。塔には不思議な吸引力がある。憧憬と

歓喜を与えつつ否応なしに人を引き寄せたのだ。その下には壮麗な伽藍があり、御仏が存するのだと思うと、私の胸は熱くなる。

幼い頃、独りで白川峠を越えて歩いた太山寺、古びた山門の遙か向こうに原生林をバックにそびえ立つ三重塔。遠足で降り立つた尾上松の駅、北へ向かう道筋で、工場の煙突越しに見つけた鶴林寺の塔の相輪。奈良を走る電車のすぐ近く、車窓に身をよじり食い入るように眺めた薬師寺の東塔。これらの映像は今もセピア色に染められて私の脛に焼きついている。

私はペンを置き、煙草をくわえてマンショ

ンのベランダに出た。薄つすらと雪化粧の残  
つた東山を眺める。入居して十余年、今で  
は林立するビルに遮られてしまった清水寺  
の三重塔。その遠望が惜しまれてならない。

完



窓辺

高阪博一

顔を洗つて、二階にある自分の部屋に入った。向かいの木蓮を見た。四メートル程の道を挟んで家があり、その入口脇に大きな木蓮があつた。一寸前まで、蕾は暖かそうでふんわりとした毛のようなコートに覆われていた。今は、そのコートを破つて、薄い黄緑の蕾に変わり、もうすぐ、清楚でいながら、確実に自分を示す白い花を、咲かそう

としている。

いつも行く散歩道には木蓮がない。その代わりといつては何だが、梅や桜は多い。今年が遅い梅はもう散つてしまい、あれだけ綺麗だった花びらを人々が無造作に踏みつけて歩いている。そろそろ桜の蕾は膨らみだしている、艶やかでいて、何か儂げな時を演じようとするかのように。

「さてとー」わたしは言いながら、窓の傍に置いている肱掛椅子に坐つた。ぐーと体重を後ろにかけて、背中で押すと身体が多少

寝たような状態になる。そのままの状態で両足を伸ばし、前にあるスツールに足を乗せる。わたし流のリラクゼーション、首を右側に向けて、ぼんやりと空を眺めた。

窓は縦一メートル、横二・五メートルの大きさで、約七十センチに三分割されている。床からわたしの腰骨の高さ辺りにあるので、坐ると、ちょうど首の高さぐらいの所に窓がある。まだ、肌寒い。開ける気にはならない。乾いた水滴の跡がある。昨夜は雨だったようだ。

何も考えることなく、ぬけるような、それでいて焦点の定まらない青空を眺めていた。

向こうの方に見える工場の煙が真直ぐに上がっている。風は無さそうだ。黒色や緑色のくすんだ屋根が見える。「電柱つて多いよな。それに電線も…」と思つてみると、窓から四、五メートル程のところに、黒い二つの物体が、ふんわりと隣同士に舞い降りた。

「鳩にしては小さいし、雀にしては大きい、いったい、何やろ」

いつも、外を眺めているのに、鳥の名前を覚えようとはしなかった。今まで犬や猫も飼つたことがない。飼つたところで、気持ちよ寄せられるものにはならないと思つていた。なのに、その時不意に、そんなことを思つて

しまった。すると、次に、あの二羽はどんな関係なのだろうと、妙なことが頭に浮かんだ。

「首を曲げて向き合っているな。嘴で突きあつてるな。羽根で互いに触りあつてるな。多分、夫婦やな」 根柢もなく単純にわたしは考えた。すると、今度は「どんな夫婦なんでしょう」と思うようになった。「仲の良い夫婦に決まつてる。あれだけ寄添っているんやから」と独りだけの部屋で呟いていた。

「どんな話をしてるんやろか。何か盛んに首を縦に振つてるな。言うこと聞かない息子のことやろか。家を出て、一匹で暮らすという

娘のことやろか」 何となくぶつと吹き出してしまった。自分勝手にどんな想像でもできる。相手は何もわたしに喋りはしない。ただ、こちらを向いて、首を振っているだけだ。

「なあ、にいちゃんつて。あのおつちゃん、よう窓際に坐つてるな。外ばかり見てるけど、なに見てんねやろな。うち、不思議やねん。朝の餌獲りの帰り道に、この電線で休んでると、いつも見るもんね」

「そやな。じーとこつちばかり見てるよな。鳥に興味あるんやろうか」

「ありそうな感じやないよ。なんか、すること

ないんちやう。ぼんやり見てるだけやよ、うちそう思うわ」

「暇で、ええな。ぼくら、餌獲らな、生きていかれへん」

「なんか、人間には、年金いう有難いものがあるそやで。歳いつたら、お金呉れるねんて。なあ、にいちゃん」

「ほんまかいな。そしたら、僕らみたいに、1日三回、餌獲りに行かいても、生きていける、ちゆうことかいな」

「そおや」

「そら、ええな。われわれ、鳥<sup>ちようかい</sup>世界にも導入せなあかん。いつべん、皆に言うてみよ」

「あかん、あかん、にいちゃん。そんなん、貰うようになつたら、じーとして、餌獲りせいへんようになるとうち思うわ」

「ほんま、賢いもうとやな。あのひとみたになつてしまふな」

「そろそろ、いこか。おとうちゃんやおかあちゃん、心配してるかもしれへん」

「そやな。いこ」

二羽が電線を離れた。あの夫婦はこれから何処へ帰るのだろうか。ネグラだろうか。それとも、遅い餌獲りだろうか。放物線を描くようにゆつくりと舞い上がり、さつと角度

を変えて、青空の中に消え去って行く鳥を  
見つめながら、そんなことをわたしは考えて  
いた。

「カフェ・オーレ、出来たよ」と階下の方で  
女房の声がした。立ち上がって、ふーと一息  
吐いた。これから、わたしの長い一日が始ま  
る。

了



一陣の風

僕が見えるでしょうか

どこかにいるであろう「あなた」に

毎日を生きることには精一杯で

気付けば足元ばかりをみている

勢いよく走っていた足はいつのまにか絡まり

歩き方さえ分からなくなる

足を止めて上を見る

視界は空間を取り戻し

大西隆史

宇宙の一員へと還ってくる

僕の意識は足元から昇りはじめ

未知なる世界へと歩を進める

僕が夢見た彼方へと

風が頬を打った

今しがた旅立った「僕」はいつか

どこにいるかもしれない「あなた」に出会うことでしょう

そうしたら「僕」は風になり

「あなた」を駆け抜けるのだ

僕を感じるでしょうか

どこかにいる「あなた」に

生きる

大西隆史

生きていくということに鈍感になりすぎたのだ

いま生きていくということ

命を奪っているということ

命を燃やしているということ

にんげんという機械に命という燃料をつぎ込んで動かす

どれだけの命を燃やしているのだろうか

街中の雑踏

公園の一角

チヨモランマの上から

マリアナ海溝の奥深く

命はどこにでも溢れている

人間は万物の霊長だなんていうが

しよせんは命を喰らって糞をして

眠りをむさぼりセックスをするだけの生き物ではないか

生まれた時から当たり前のように

快樂のために命を奪う

そんな生き物が万物の霊長だなどとおこがましいとは思わないのか

生きているということに

命を奪うということに

鈍感になりすぎているのではないだろうか

ふと思ふ

生きるというブラックホールに飲み込まれているのだと

生きていくということ  
いま生きていくということ  
それは………



NHK・TVより

〔俳句〕

春愁

夏子

春の窓開ける汽笛の音と波の音

春の波 佇む私においでよと

春立つ日 髪型変えて口紅濃く

春驟雨 訳も言わずに飛び出した

春愁のわたくしの影連れ歩く

ふつと立ち止まる誰かが呼んでいる



ナショナルジオグラフィックより

◆退会

伊藤富實夫・松田政雄さん

「長い間ありがとうございました。」

◆読むだけ会員に変更

佐藤俊明・佐藤由紀子さん。

※佐藤さんからは、3600円を寄付として別にいただいております。

◆新読むだけ会員

山端早百合さん。

太田エミさん。

◆**締切のお願い** - 締切過ぎに原稿が届きます。「アクロス」はワープロソフトに落とし込んでレイアウトを整えています。そこに、新しく入れ込むとレイアウトが崩れます。手間のかからないものや短いものは可能な限り入れますが、無理なケースもあり、締切をお守り下さい。また、例外的に手書きもお受けしていますが、この場合は、原稿用紙10枚程まででも、締切の最低一週間前にはお届け下さい。打ち込むのに時間がかかります。10枚で4～5時間集中しなければなりません。尚、締め切り後にいただいた原稿は次号回しにします。この場合、デジタルデータは保存しません。破棄しますので次号以降に掲載希望の場合は必ずその締め切りに間に合うように再送下さい。郵送の場合は返却しますので、同じように再送下さい。

## おめでとう

### 第十七回 「前田純孝賞」学生短歌コンクール

選者 佐佐木幸綱（「心の花」主宰・編集長）

逢えなくなつて言いたい言葉あふれてるごめんねありがと愛してる

九州大学 大西隆史

儂い花に理想を乗せて

花が咲く

一面に咲き乱れ

春の透き通った空を薄桃に染める

花の命は短くて

気が付けば季節の風に誘われ

小さな花弁を散らしていく

咲いたと思えばすぐに散つてしまう

それは一瞬の命

大西裕子

その儂さに人は心惹かれる

儂いからこそ美しい

誰かがそう呟いた

けれど：可笑しいね

儂いからこそ美しいのなら

どうして人は一瞬でも永く生きようと足掻くのか

人は弱いから

儂さこそが美しくとも

自らが儂く散ることは怖いのだろう

だからこそ人は花に託すのだろう

自分の思いを 理想を

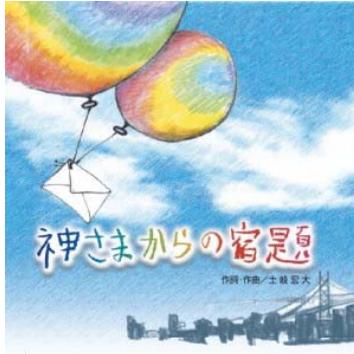
儚く散り逝く花々に

自らの希望を込めて眺め

その儚さに惹かれていくのだろう



## 筋肉が骨になる難病（FOP）



◆筋肉の細胞が骨に変わる「進行性骨化性線維異形成症（FOP）」という難病があります。

明石でも魚住中3年の山本育海君がFOPです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し。ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせはFOP明石事務局

(080・3775・2257)

◆絵本やCDの販売も行われています。詳しくは下記HPでご確認下さい。

◆ <http://www.fop-akashi.jp/>

## アクトス写真館

国鉄明石駅 昭和10年代

『ふるさとの想い出 写真集 明石』 昭和54年 国書刊行会

これは昭和10年代の明石駅ですが、国鉄ではなくて省線という時代でしょうか。南から北に向かつて撮ったものようです。



前号に載せた商工会議所の写真と違い、現在の駅舎の面影とか、位置関係も判りません。専門家が見れば背後の木々などの形から判明するかも知れませんが……。大きな国旗は当時の我が国の有り様を思い出させます。もつとも、現代でも国旗があつてもかまわないと思えますが、祝日にさえ見たこととはありません。人力車がとまっています。右側を見ると丸いボディの車が見えます。また昔懐かしい白い割烹着を着た女性がいます。そばには小さな子ども。男性は洋装と和服が半々ですが、和服姿の男性も帽子を被っています。足許は下駄です。子どもも自転車が見え、遊んでいます。現在では駅前は木造、右側に北側へ渡る跨線橋が続いています。手前の街灯は粋な飾りです。ポストも昔のものは味がありますねえ。

## ◆ショートショート

◆明花さんから提案頂いたコーナーです。俳句や短歌・川柳・詩などはコーナーに入れませんが。最長は2000字くらいまでとしました。一応、コーナー対象であることを明記してお送り下さい。判断についてはこちらにお任せ下さい。

孫という名の宝物

小川悦子

本棚の整理をしていると、初孫が生まれてくるひと月前に書いた「まだ、見ぬ孫に」というタイトルの用紙が出てきた。

早く会いたい、いっぱい抱っこしてあげるからねという期待と、無事に生まれてきてねという心配の気持ちが入り交じった心境が書かれていた。その他に「愛されるために子供

は生まれてくるという」本の中の一節も綴つてあつた。家族みんなで大切にしようと思つた。娘にあなたを初めて抱いた時、愛おしかつたよと話したことも。

あの日から五年が過ぎた今思うことは、孫は想像していた以上に可愛いということ。生まれてきてからずっと小さな存在に癒され、元気をもらい、家の中も笑うことが今まで以上に多くなつた。深い愛情を自ずとかけられた。心の成長を嬉しく思い、できることならもう少しこれ以上大きくならないでと願う。

この頃、両親や今は亡き義父や義母のことをよく思う。遠くにいたので、近くで会えないことが寂しかつただろう、娘たちがどれほど可愛かつたことだろう。無口な父が一緒に遊んでいると童心に返つていたことが懐かしい。自転車に二人の娘を乗せて、よく遊びに連れて行つてくれた義父のことも思い出す。おじいちゃん、おばあちゃんの愛情を一身に受けて娘たちが大きくなつたことに今改めて感謝する。

天国で見守つてくださいね。気が向くと小さな手を合わせています。

賞味期限

高阪博一

今年の一月、イーストマン・コダックが倒産した。老舗のフィルムメーカーで、一八九二年の創業というから、百二十年になる。フィルムカメラ愛好の方なら、さぞかし残念なことだろう。

この『フィルム』が無くなりつつある。いや、なくなつたに等しい状態だ。デジタルカメラが全盛で、それを必要としないのだから、仕方がない。どうも、この言葉は賞味期限が切たようだ。

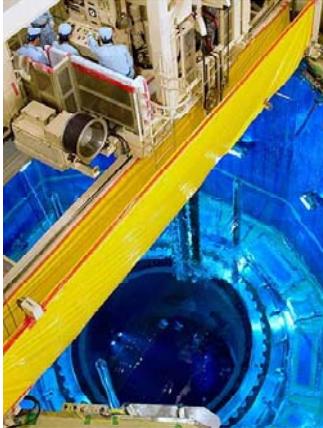
ふと、この手の言葉が幾つか思い出された。『ガリ版』、先生が遅くまで作つておられたのを思い出す。

これは賞味期限切れだ。『公衆電話』、携帯電話がこれだけ普及すれば、用事はない。いざ、探そうとしても見つからない。これはもう直ぐその期限が切れそうだ。それに、『ワープロ』、どなたかに怒られそうだが、パソコンに置き換わつてしまつて、これは賞味期限が切れたようだ。単独機で持ち続けていると、ひよつとして、「何でも鑑定団」に出場出来るかもしれない。先に挙げた「ものたち」は罪のないものばかりだ。賞味期限が切れてしまつても、懐かしく思い出されるであろう「ものたち」だ。

『あれ』が昨年三月大事故を起こした。賞味期限はまだまだあるのに。人の進化は利便性を追及したところに生れたと思つている。その利便性を幾

ら追求しても、己で最終の制御が出来ないものを作るべきではない。まるで、便利なマンションを作つて、快適な生活を保障しながら、トイレを作り忘れたようなものだ。欠陥商品に賞味期限は最初からないのだ。

了



時事ドットコムHPより



美しい海と雄大な自然に囲まれた  
玄海原子力発電所によろこそ

玄海原発HPより

あなたへ

小川悦子

いつもお仕事ご苦勞様です。50歳の坂を過ぎての管理職の任務は、身も心もくたくたになることでしょう。少しでもゆつくりとした時間を一緒に、これからも過ごしましょう。

あなたは結婚した時に言いましたね。

「男と女には役割がある。男は外で働き、女は家庭を守るのがいい」と。その言葉どおりに結婚して32年間、専業主婦でいさせてもらいました。子供に手がかからな

くなつても、娘たちが結婚して独立していった今でも、それは同じです。こんなにゆつたりと生活していいのかなと思う日もあるくらいです。自分の趣味ができる時間、孫と遊べる憩い、お金には代えられませんが、ありがとうございます。

でも体が心配です。大病をしたとは思えないくらい明るく、前向きなあなた。我慢強いですね、たまには弱音をはいていいですよ。これからも寄り添い、時には支えていきますからね。

毎日新聞「花時計」掲載

なにしてる

大西亥一郎

冬の寒さに重しをつけて

春の湖底に沈めています

群青色の水面から

梅の香桜色青嵐が

われ先勝ちにたちのぼり

恋したばかりの私の胸を

激しく揺さぶり続けます



◆近隣地域で、浄土宗のお寺を、お探しの方のお役に立ちたいと思います。

浄土宗 永金山 えいこんざん 常纂寺 じょうざん じ

〒651-2133 神戸市西区枝吉4-40

■ TEL : 078-928-6622

■ FAX : 078-928-6858

◆メール [hayato13@yc4.so-net.ne.jp](mailto:hayato13@yc4.so-net.ne.jp)

住 職 佐藤 俊明

副住職 佐藤 明宏

平成24年(2012年)4月

アクトス会員(順不同)

大西 亥一郎

柴田 秀夫

小川 悦子

塩見 伸介

瓜生 八頼子

大西 裕子

沼田 知子

高阪 博一

土谷 智子

皿谷 文雄

大西 隆史

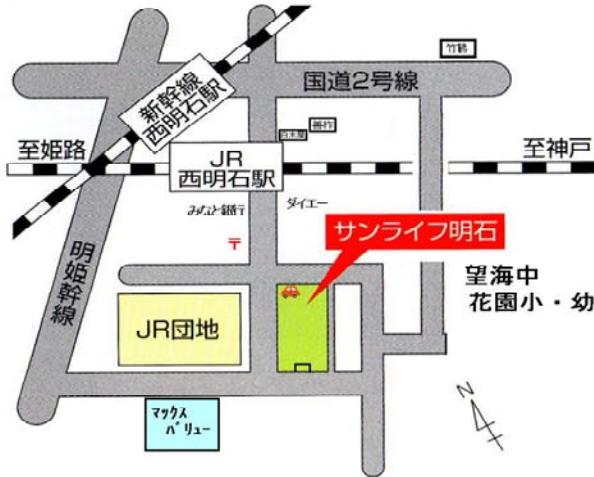
[読書会員]

佐藤 俊明

佐藤 由紀子

山端 早百合

太田 エミ



◆ 中高年齢労働者福祉センター  
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合はご注意ください。●手帖などにお控え下さい。●出欠のご連絡は不要です。

サンライフ明石は

国道2号線では、「竹鶴」前(信号あり)を南下し跨線橋を越えて下さい。

明姫幹線ではマックスバリュを目標にどうぞ。

建物北に駐車場あり。建物入り口前に駐輪場。建物東にバイク置き場あり。

南が入り口(入つてすぐ左手で上履きにはきかえて下さい。会場は2階です。)

編集室から

①次号(第15号)の原稿締め切りは6月末必着です。

②前ページにありますように、例会場は、サンライフ明石です。変更・中止等の場合はHP掲示板、メール等でご連絡いたします。

五月例会は19日(土)  
七月例会は21日(土)  
九月例会は15日(土)

です。

③HPに、14号までを、PDFと一太郎ファイルで掲載しました。

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>  
(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきます。)

④沢山の原稿をいただきました。ありがとうございます。今号は10.5ポ以上で組みました。10.5ポというのは国際連

合などでも使用されている世界標準的な活字の大きさです。

常連の方、2名が今回はパスされてスペースが少し空きました。この14号の文字数が空白を除いて約2万字、400字詰め原稿用紙50枚分です。

もし9ポでびつしりと組み、70ページくらいにしますと原稿用紙100枚の作品が載せられます。

♥ デジタルも清書してお送り下さい。

本誌はネットで、或いは携帯でデジタルデータをお送りいただくことで成立していません。通常、印刷業者に手書き原稿を打ち込み依頼しますと1ページ(原稿用紙2枚くらい)千円です。短歌・俳句などの冊子ではない、小説・随筆が多いアクトス誌は、打ち込み費用だけでも現会費では成立しません。それを可能にしているのは、デジタル原稿を直接流し込めるからです。

手書き原稿の場合、清書して提出するのは常識です。ところがデジタルの場合、「清書」が抜けてしまいます。画面上にきれいに活字体で表示されるため、整った感じを受けるのが主因だと想像します。

誤字脱字のチェックは当然で

すが、必ず「声」に出して読む、更に第三者に読んでもらうようにしましょう。

本来、散文などは読者は黙読ですが、声に出すことで、文のリズムやつながり、意味内容などがはつきりします。

但し、黙読すると意味のわかる文章が音声で聞くと判らない場合もあります。その場合は、目で読んで判ることを優先して下さい。

またチェックの場合、内容の感想ではなくて「整っているか」「流れに無理がないか」をまず見てもらいましょう。

『デジタルの清書』をお願いいたします。

尚、「声」に出して読むことについてアクトス掲示板に載せた「音声ソフト」に加筆して通信

に載せています。

◆読書会員(読むだけ会員)

お二人の方が、会員になつて下さいました。嬉しくて、感謝にたえません。

自分が書いて掲載されるなら会費負担は仕方ありません。しかし、同人誌を、『継続して』お金を出して読もうというのは、例が少ないと思います。どこかの会合でたまたま一冊買った、頼まれて一冊とか言うようなケースはありますが……。本当にありますがどうございます。お金を出して読むに耐える作品を頑張つて書いていきたいと思えます。

読書会員は年額が3200円です。「4回配本」興味をお持ちの方はお振り込み下さい。

「亥一郎」

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メール  
を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可  
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614  
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会

奇数月第3土曜日

※午後 1時半、

◆場所

中高年齢労働者福祉センター

(サンライフ明石)

〒673-0041

明石市西明石南町

3丁目1-21

電話 078-923-0770

※JR西明石駅南、徒歩3分

(新幹線西明石駅南徒歩5分)

※明石市立望海中学校・花園

小学校の西、徒歩2分

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、地球の反対側からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加いただかなくとも、HP掲示板などで状況を知ることも可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

アクトス 第14号

平成二十四年五月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）800円